

國學院大學學術情報リポジトリ

在日中国人ニューカマー2世の言語使用について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-10-22 キーワード (Ja): 在日中国人, ニューカマー2世, 言語使用 キーワード (En): 作成者: 王, 秀芳, 王, 紫琪, Wang, Xiufang, Wang, Ziqi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000955

在日中国人ニューカマー 2 世の言語使用について

The Language Use of Second-Generation Chinese Expatriates in Japan

王秀芳・王紫琪

キーワード：在日中国人 ニューカマー 2 世 言語使用

Key Words: Chinese expatriates in Japan second-generation immigrants language use

要旨

本稿はアンケート調査を行い、在日中国人ニューカマー 2 世の言語使用実態について考察したものである。分析した結果、2 世は中国語より日本語を多く使用しており、日本語は日常の言語生活においては優位言語になっているが、中国語教室に通ったり、家庭で積極的に中国語を使用したりして中国語継承に努力している。また、2 世の言語使用は相手の国籍、相手の使用言語、相手の身分や話題などの諸要素に影響されることを明らかにした。

Abstract

Based on a questionnaire survey, this paper discusses the language use of second-generation Chinese expatriates in Japan. The analysis results show that, for the second-generation immigrants, although Japanese is more frequently-used and has been the dominant language in their daily language life, they are making efforts to inherit the Chinese language by attending Chinese language classes and actively using Chinese at home. The study also reveals that the language use of second-generation immigrants is influenced by various factors such as the nationality and identity of the partner, the language used by the partner, and the topic of the conversation.

1 研究動向と本稿の課題

グローバル化の進展は国際人口移動を促進している。日本は留学生 30 万人計画や高度専門職ビザの新設、永住権獲得所要年数の短縮などの施策を通じて、外国人の日本への移動、長期滞在を促している。日本政府が公表した在留外国人統計⁽¹⁾

(1) 在留外国人統計(2024 年 6 月 10 日閲覧) https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20230&month=12040606&tclass1=000001060399&result_back=1&cycle_facet=tclass1&tclass2val=0

によると、2023年6月、日本に在住する中国人が848,715人に達し、在留外国人全体の24.8%を占め、日本最大のエスニック・グループである。彼らは日本語主流の言語社会でどのような言語生活を送っているか。現地語の日本語と民族語の中国語を自由に操ることができるか。また、次世代の中国語能力は保持されているか。このような研究はまだ少ないが、最近注目されてきている。

陳天璽(2001)と陳於華(2005)は在日中国人の二言語併用、中国語と日本語の多面的な使い分けを概説したものであるが、論の展開及び基になるデータ、参考文献は不明であるという問題点が指摘できる。最近、具体的なデータに基づいたものとしては、董劍秋ら(2021)と小川典子(2023)が挙げられる。董劍秋ら(2021)は京都在住の中国人家庭に生まれた兄妹(兄6歳、妹4歳)2人を対象に、OBC会話テストと絵画語彙テストPPVTを用いて日本語と中国語の言語能力を測ったものであり、在日中国人家庭児童の言語能力の一端を明らかにしたと評価できる。小川典子(2023)は日本の大学で中国語を学習している4名の継承中国語学習者を対象に、4年間渡って年一度の中国語能力試験(HSK1.0)及び自己評価を通してデータを収集、考察を行ったものであり、4人の中国語レベルを明らかにしたと言えよう。この2本の論文ともケーススタディー研究であり、在日中国人の全体像が見られない。

一方、在日中国人を対象に、大量なデータを集め、実証研究を行ったものとしては穆紅(2008)、韋九報(2021)が挙げられる。穆紅(2008)は、日本の公立小中学校12校に在籍している中国人生徒52名にOBC会話テスト、また学生の保護者を対象にアンケート調査を行い、中国語会話力(の認知面)に影響を与える要因について論じたものである。中国語の基礎言語面と対話面が比較的高いレベルにあるのに対し、認知面は比較的低いレベルにある。また、中国語保持努力、特に中国語で読み書きを行うことは中国語の認知面の保持・育成を促す可能性が高いと指摘している。在日中国人児童の中国語会話レベル、および二言語環境に置かれている生徒の中国語保持・育成に影響を与える要因を明らかにした点では評価できるが、実際の言語使用についてはまったく触れていない。韋九報(2021)は日本の中華学校に通っている5年生～9年生の234名の学生を対象にテストとアンケート調査を行い、学習動機が中国語継承者の継承語保持への影響について検討したものである。学習動機は中国語能力と高い相関が見られると指摘している。これも穆紅(2008)と同様、継承語保持に焦点を当てているため、言語の使

用実態についてはほとんど触れていないという問題がある。

以上のように、在日中国人の言語使用実態に焦点を当てた研究は未だに少ない。彼らは日本語主流の言語社会でどのような言語行動を行っているのかは興味深い課題である。

筆者はこのような問題意識を持ち、長年在日中国人の言語使用について調査を行い、日本語と中国語の二言語使用実態を明らかにすることを目指してきた。王秀芳(2005)では在日中国人オールドカマーの言語使用には世代差が見られることを指摘しているが、ニューカマーの世代差については未だに論じられていない。そこで、本稿ではニューカマー2世を研究対象にし、彼らの日本語と中国語の使用実態を明らかにすることを目的とする。

2 在日中国人の呼称について

在日中国人を「華僑」「華人」「老華僑」「新華僑」「老華僑華人」「新華僑華人」「在日中国人」などと呼ぶように、研究者によって、その呼称は様々である。混乱を招く恐れがあるため、ここでは本稿で使用する用語について説明しておきたい。

2.1 在日中国人

本稿で言う在日中国人とは、日本に90日以上滞在し、かつ合法的登録手続きを行った中国出自の人を指す。この中には、「華僑」「華人」と呼ばれる人々の他に、日本駐在の中国の国家公務員、政府派遣の技術者、研修生、留学生、就学生、短期滞在などを含む。

ところで、華僑・華人と呼ばれる人々はどのような人であろう。「中華人民共和国帰僑僑眷權益保護法」によると、「華僑」とは、外国に定住している中国公民を指す(朱慧玲2003 p.22)、華人とは、外国籍華人の略称であり、「外国籍華人とはもともとは華僑またはその子孫で、後に居住国の国籍に加入し、あるいはそれを取得したものを指す」(朱慧玲2003 p.22)、すなわち、外国に定住している中国国籍保持者を「華僑」、居住国の国籍を有する中国出自者を「華人」と呼んでいる。したがって、日本における華人は、日本国籍を持っている。そのため、日本での在留期間は当然無期限となる。日本における華僑とは、日本に定住している

中国公民、すなわち中国国籍を持っているが、日本政府の許可する永久の居留権を獲得しているのである。留学生や就学生など最近来日した多くの中国人は、日本での在留期間は決められている、言い換えれば日本政府の許可する永久の居留権を獲得していない。そのため華僑とは言えない。

本稿で華僑・華人という用語を使用しないのは次のような理由による。

この用語は在日中国人の全体を指すことができない。上で述べたように、華僑・華人という概念には、留学生や就学生など最近来日したもっとも多くの中国人を含んでいないのである。本稿は、日本で生活を送っている中国（出自の）人全員（不法滞在を除く）を研究対象にしているため、一部の人しか含意していない華僑・華人という用語よりも、総称としての「在日中国人」を使用することにする。もちろん、中国国籍から脱離して日本国籍を有している人（華人）を在日中国人と呼んでよいかという問題がないわけではないが、本稿では中国出自、すなわちルーツは中国人でさえあれば現在の国籍と関係なく在日中国人として認めることにする。

なお、「新華僑華人」「老華僑華人」といった、華僑・華人の前に「新」「老」を付加えて呼ぶこともある。それは華僑・華人と呼ばれる人々を来日時期によって更に区分したものである。本稿では華僑・華人の用語を使用しないため、新華僑華人・老華僑華人といった用語も使用しないことにする。ちなみに、本稿では在日中国人を来日時期によって分類する際、「ニューカマー」「オールドカマー」という用語を使用することにする。

2.2 ニューカマー・オールドカマー

在日中国人と言ってもその属性は一様ではなく、来日時期によって大きく「ニューカマー」「オールドカマー」の2グループに分けることができる。では、どの時代を境にグループを分けるのか。以下、在日中国人に関する研究者の説明を紹介した上で本稿におけるグループ分けの基準を定めたい。

過放（1999）が「在日華僑を、日中国交正常化の1972年を境にそれまでに来日した人々とその子孫を「老華僑」（在留資格の①～③）、それ以降の人々を「新華僑」（②を除く①～②⑩）とに分ける」（p.9）と述べている。このことから、過放（1999）は1972年をグループ分けの基準にしていることが分かる。また、朱慧玲（2003）は次のように述べ、過放（1999）とまったく同じ基準で分けていることが

分かる。

日本の老華僑華人とは、1972年の日中関係正常化以前、主に第二次世界大戦前に日本に渡り、居留したものとその子孫を指し、新華僑華人とは、1972年以降、主に中国の改革開放が始まってから日本に渡り、居留したものとその子弟を指す。(朱慧玲 2003 p.23)

このように、過放 (1999)、朱慧玲 (2003) は1972年を境に在日中国人を二つのグループに分けると明確に指摘している。ところが、以下のように、グループ分けの基準を明確に指摘していない研究者もいる。

日本においても、1970年代以前の旧来の華人社会は、急速に、そして大きく変動してきている。とりわけ1980年代半ば以降、多数の華人ニューカマーが来日するようになり、日本の華人社会では、急激な変化が生じた。(江衛ら 2005 p.34)

江衛ら (2005) は1972年が境目であると明確に指摘しなかったものの、否定したわけでもない。「在日中国人人口の変遷に着目すると、第二次世界大戦以降、国交のない中国本土からの人の流れは途絶え、1950年～70年代までの30年間はほぼ横ばいで推移していた。一方、1972年の日中国交正常化が大きな転機となり、在日中国人人口には顕著な変化が現れる。その後、中国の改革開放、日本の留学生受け入れ10万人計画などを機に、80年代に入ってから中国人の増加が著しくなった」(過放 1999 p.62)。1972年時点では在日中国人人口の変化が激しくなかったものの、大きな変化をもたらした年であることは疑う余地がない。そこで、本稿では、1972年をグループ分けの境にする。したがって、本稿で言うオールドカマーとは、1972年の日中国交正常化以前、主に第二次世界大戦前に日本に渡り、居留したものとその子孫を指す。ニューカマーとは、1972年以降、主に中国の改革開放が始まってから日本に渡り、居留したものとその子孫を指す。

1972年以降に来日した中国人の中に、日本籍を有する人 (一般的に新華人と呼ばれている人) がいる。また、日本籍に加入していないが日本政府の許可する永久の居留権を獲得している人 (一般的に新華僑と呼ばれている人) もいる。一方、もっとも多いのはやはり留学生や就学生のような日本の国籍も永久の居留権も有しない人々である。これらはすべて本稿で言うニューカマーとなる。

なお、「中国帰国者」を在日中国人ニューカマーとして取り扱う研究者もいる

が、中国帰国者は元々日本人であるのに対し、在日中国人は元々中国人である。両者のルーツがまったく異なる。それに、日本の政策なども異なることから本稿では彼らを取り扱わないことにする。

また、本稿の研究対象はニューカマー2世である。ここでは、世代の区分方法について説明しておく。言語形成期を過ぎてから、中国から日本に移住した中国人を第1世として計算する。日本で生まれた1世の子供を「2世」と呼ぶ。以降このように加算する。なお、一般的に言語形成期は12もしくは13歳までであるという。

3 調査概要

3.1 調査方法と回答者の属性

今回使用するデータは2023年2月から2023年3月にかけて日本に在住する中国人子女を対象としたアンケート調査によって得られたものである。調査票はネット上で配布そして回収。なお、回答者の言語能力を考慮して、日本語版と中国語版の2種類作成、回答者に自由に選んでもらった。また、低年齢の児童の場合、保護者に協力してもらうようお願いした。

このような調査方法を用いて調査した結果、表1に示したような31名のデータを収集できた。表1から分かるように、回答者は東京首都圏に集中しており、10～16歳の小学校高学年生から中高生が最も多い。最初に日本に移住したのは彼らの親であり、彼らの多くは日本で生まれ日本で育てられた2世である。生まれてから日本に移住した7人全員が言語形成期に日本に移住したことから、1世ではなく2世であると判断できる。

表1 回答者の属性

現住所		年齢		来日年齢		性別	
首都圏	24人	幼稚園(4歳)	1人	日本生まれ	24人	男性	18人
宮城	3人	小学校低学年(6-8歳)	4人	0歳～2歳	5人	女性	13人
大阪	2人	小学校高学年(10-12歳)	9人	5歳	1人		
青森	1人	中高生(13-16歳)	14人	7歳	1人		
富山	1人	大学生(18-21歳)	3人				

首都圏の内訳：東京13人、千葉6人、筑波4人、横浜1人

N = 31人

3.2 調査内容

在日中国人ニューカマー2世の日本語と中国語の使用実態をより客観的に把握するために、場面を設定する際、家族を相手にする時と、家族以外の方を相手にする時と、大きく2種類に分けた。また、言語能力がさほど必要としない挨拶場面と比較的に高い言語能力が必要とする会話場面と、さらに2種類大別して場面を設定した。主な調査項目は表2に示した通りである。

一言挨拶と言ってもその範疇は幅広い。儀式・会合などの際のある程度の長さを持った「談話」を挨拶と言える。また、「おはよう」「またね」といった日常的な出会いや別れの場合で表現一つで終わるのも挨拶である。勿論、手振り・身振りといった非言語行動も挨拶として認められる。本稿は、ニューカマー2世の言語選択に着目しているため、対象は複雑な表現形式ではなく、極めて簡単で典型的挨拶ことばの代表例である「おはようございます」に絞ることにした。具体的に、調査票では「朝起きてからご家族にどんな挨拶をしますか。」という質問をし、答えとしては表2の(1)～(6)の選択肢から一つを選んでもらった。なお、選択肢の内(3)(4)(5)は中国語の挨拶であり、それぞれ日本語の「おはようございます」「おはよう」「起きましたか」に相当する。

会話場面については、まず、ニューカマー2世のネットワークを考慮して話し

表2 言語使用実態に関する調査項目

	会話する時	挨拶する時
家族と	父親、母親、兄弟	父親、母親、兄弟
家族以外の方と	[1] 中国人である中国語の先生と雑談する	[7] 中国人である中国語の先生に挨拶する
	[2] 中国人である中国語の先生と学習内容について話す	
	[3] 中国人の同級生と雑談する	[8] 中国人の同級生に挨拶する
	[4] 中国人の同級生と学習内容について話す	
	[5] 中国語のできる日本人に話しかける	
	[6] 日本人に中国語で話しかけられる場合	
選択肢	①中国語のみ	(1) おはようございます
	②日本語と中国語が混ざるが、中国語が多い	(2) おはよう
	③日本語と中国語が半々程度	(3) 早上好
	④日本語と中国語が混ざるが、日本語が多い	(4) 早 (5) 起来了
	⑤日本語のみ	(6) その他 ()

相手を日本人と、同じマイノリティ社会に属する在日中国人と設定した。また、相手の身分や使用言語、さらに話題なども2世の言語使用に影響を与えると想定して、【1】～【6】の6場面を設け、それぞれの場面における使用言語を①～⑤の選択肢から最も相応しいものを一つ選んでもらった。

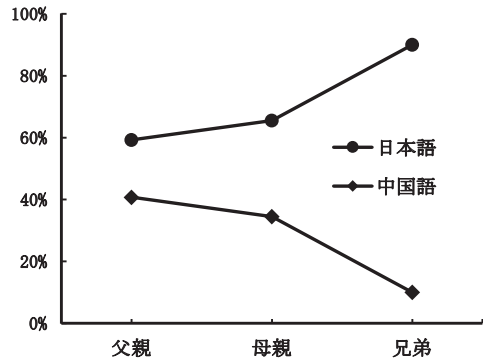
4 家庭での言語使用

本節では、前節で述べた調査方法で回収した31名のデータを用い、一緒に暮らしている家族との言語使用実態を明らかにしていく。

4.1 家族に挨拶する時の言語使用

図1は家族の方に挨拶するときの日本語と中国語の使用率を示したものである。ここで言う日本語とは、表2の選択肢(1)(2)の回答を合計した数値、中国語とは(3)(4)(5)の回答を合計した数値である。2世の6割強の人が朝起きて、日本語で父親または母親に挨拶をしている。相手が兄弟になると、日本語で挨拶する人がさらに増え、9割にも達する。要するに家族に挨拶する場合、2世の多くは中国語ではなく、日本語を使用している。

図1 家族と挨拶する時の言語使用実態



4.2 家族と会話する時の言語使用

図2は家族と会話する時の言語使用実態を示したものである。「日本語と中国語が混ざるが、日本語が多い」の使用率が最も高いことから、2世は家庭では日本語をベースにしながら中国語を混ぜて話すのがもっとも多い言語行動であることが分かる。一方、「中国語のみ」または「日本語のみ」に絞って見ると、両親と会話する時は、日本語を使わず中国語のみで話す2世はいるが、兄弟と会話する時は、中国語のみで話す人は一人もいないが、一方、全く中国語を使用せず、日本

語のみで話す人はかなりいる。このように、2世は兄弟にはより日本語、親にはより中国語を使用する傾向がある。この傾向は図3を見るとさらに分かりやすい。

図3は会話場面における言語使用の平均値を図形化したものである。回答番号を言語使用を示すスコアと見なし、「①中国語のみ」と答えた人に1点、「⑤日本語のみ」と答えた人に5点を与え、平均値を計算したものである。したがって、平均値の最大値は5で、最小値は1となる。なお、値は5に近いほど日本語、1に近いほど中国語を使用することを示す。兄弟と会話する場合の平均値は4.14であることから、中国語より日本語の方がより多く使用されていることが分かる。親との会話になると、平均値は3点前後になり、中国語と日本語の使用量はほぼ半々程度である。このことから、在日中国人ニューカマー2世は親と兄弟に対する使用言語が異なり、親に比べ兄弟と話すときはより多くの日本語を使用する傾向があると分かる。

ところが、兄弟に比べ親を相手にする時は、中国語が確かに多く使用されているが、しかし、日本語が使用されていないというわけでもない。平均値が3点前後であることから、日本語と中国語の二言語とも半々程度で日常的に使われていることが分かる。兄弟との使用言語も考慮すると、家庭では日本語のほうがより日常的に使われ、いわば普段着の言葉になりつつあると読み取れる。

図2 家族と会話する時の言語使用実態（使用率）

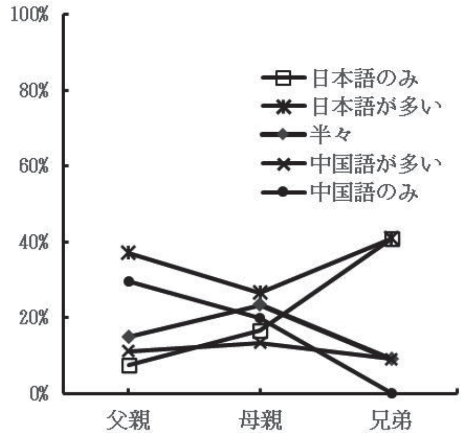
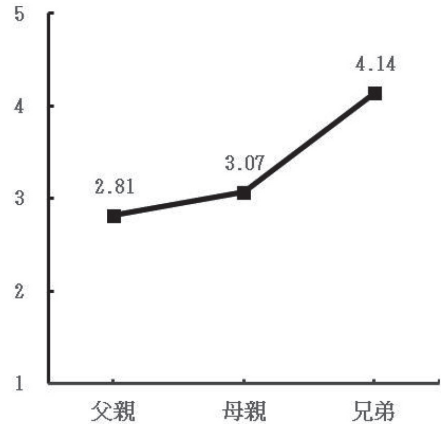


図3 家族と会話する時の言語使用実態（平均値）



5 家族以外の方との言語使用

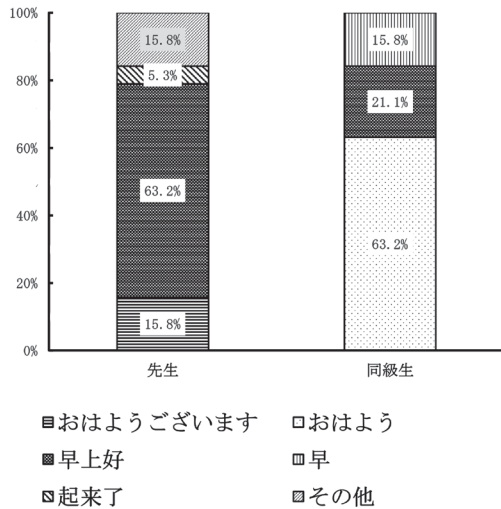
前節では家庭での言語使用実態について見てきた。本節では家庭外、すなわち家族以外の方との言語使用について検討してみたい。

5.1 家族以外の方と挨拶する時の言語使用

図4は中国語を教える中国人の先生、一緒に中国語を勉強している中国人の同級生に挨拶する2場面(表2の【7】【8】)での言語使用実態を示したものである。中国語の先生に対しては、「早上好(おはようございます)」と言って中国語で挨拶する2世が最も多い。2番目に多いのは「その他」である。実は調査では「その他」と回答した方に実際に使用する言葉を自由に記入してもらった。確認したところ「老師好(先生、こんに

ちは)」「老師早上好(先生、おはようございます)」といったバラエティに富んだ中国語の挨拶表現であることが分かった。「起来了(起きましたか)」と回答する人数も合わせると、中国語で挨拶する2世は8割強に達していることが分かる。ところが、相手は同級生になると「おはよう」と日本語で挨拶する人が急増する。先生も同級生も同じ中国人ではあるが、前者は中国語を教える身分である。この身分は2世の言語使用に大きく影響を与えていることが分かる。

図4 家族以外の方と挨拶する時の言語使用実態



5.2 家族以外の方と会話する時の言語使用

会話場面の言語使用実態を把握するために相手の国籍、相手の使用言語、話題など諸要素を考慮した上で6場面を設けたと3.2節ですでに述べた。本節ではそ

の6場面の調査結果について検討する。

図5は6場面における使用言語の平均値を示したものである。平均値の求め方は4.2節で述べたのと同じであり、5に近いほど日本語、1に近いほど中国語の使用を意味する。

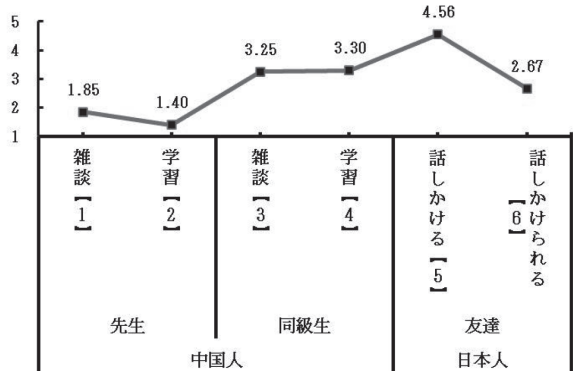
平均値が最も高いのは【場面5】の4.56であるのに対し、もっとも低いのは【場面2】の1.40である。

日本人の友達と会話する場面【5】においては、日本語が多く使用される。一方、中国語を教える中国人の先生と会話する場面【1】【2】では、中国語がより多く使用されるようになる。このように、ニューカマー2世は場面によって日本語・中国語の二言語を使い分けている。また、中国人を相手にする4場面のいずれも、日本人に話しかける場面【5】の平均値より低い。このことから、相手の国籍は2世の言語使用に影響を与えていることが分かる。中国人にはより中国語、日本人にはより日本語を使用するのである。

一方、【場面6】は【場面5】と同様、話し相手は日本人である。しかし、平均値には大きな差が見られた。自ら相手に話しかける場合は、相手の国籍を考慮して、2世は相手の優位言語である日本語で話そうとする。しかし、相手が中国語で話しかけてきたら、その言葉に応じて、より多くの中国語で話そうと努力する。それが故に、平均値は【場面6】<【場面5】となり、さらに【場面3】よりも低くなった。すなわち、相手の使用言語に影響され、相手が日本人であるのに、中国人を相手にする時よりも中国語が多く使用されることになる。この場合、相手の国籍が2世の言語使用への働きはもはや機能できなくなってしまった。このように、2世の言語使用はさまざまな要素に影響され、しかも要素間には複雑に絡まって、相互的に影響を与えているのである。

次に、中国人と会話する4場面を比べてみよう。【1】【2】の平均値は【3】【4】

図5 家族以外の方と会話する時の言語使用実態



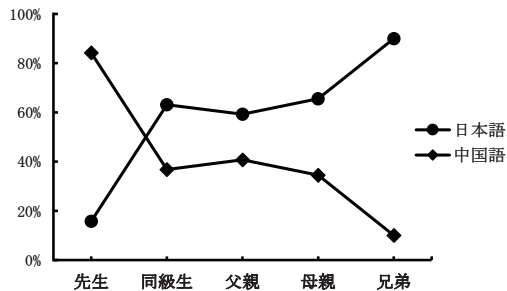
のより低いことから、同級生に比べ、中国語を教える先生と会話する場合、より積極的に中国語を使用することが分かる。また、平均値は【2】<【1】であることから、雑談に比べ学習内容について話すときは、より中国語で話そうとすることが分かる。しかし、この話題が言語使用への影響は、同級生と会話する場面では見られなかった⁽²⁾。これもまたさまざまな要素が複雑に絡まって、2世の言語使用へ影響を与えていることを語っているのである。

6 考察

以上家庭での言語使用と家族以外の方との言語使用についてそれぞれ検討してきた。本節では両方の言語使用実態を比較することによって、2世の言語使用実態をより深く掘り下げてみたい。

図6を見ると分かるように、先生に挨拶する場面を除けば、家族の方に対しても、家族以外の方に対しても、2世の多くは中国語ではなく日本語で挨拶していることが分かる。日本語で挨拶するのはもはや日常的な言語行動になっていると言えよう。では、なぜ2世は日常の言語生活において中国語ではなく、日本語で挨拶するのであろうか。

図6 挨拶場面における言語使用実態



今回の調査では2世の言語能力について自己評価してもらった。会話能力に絞ってみると(図7)、2世の多くは「ネイティブと同じように、完璧に話せる程度」と高い日本語会話能力を持っているのに対し、同じレベルの中国語会話能力の持ち主は少ない。2世の中国語能力は確かに低下していると言えよう。しかし、「中国語で話せない」人は1人しかいない。また、今回の調査項目はごく簡単なものであることを考えると、中国語能力不足が原因で、日本語で挨拶するよう

(2) 【3】【4】の平均値の差は $3.30-3.25=0.05$ で、誤差なども考えるとこれは小さすぎて差があるとは認めがたい。

になったとは考えられない。

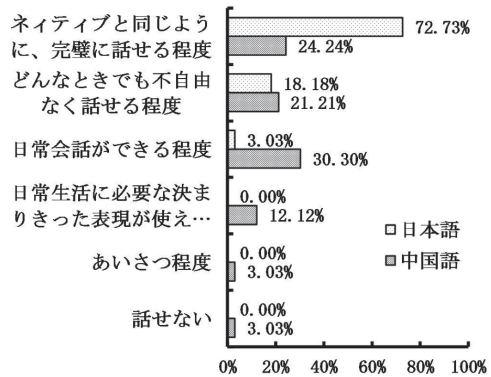
実は在日中国人ニューカマー1世も中国語ではなく日本語で挨拶する人のほうが多い。それは日本語挨拶表現の定型性と言語環境の二要因に起因すると王秀芳(2008)は指摘している⁽³⁾。日本語に比べ、中国語の挨拶表現はそれほど定型化されていないため、バラエティに富んでいる。5.1節で述べた「その他」は

まさにこれを裏付けるものである。バラエティに富んだ表現であるため、人に出会った時どんな表現で挨拶すればよいかと迷うことさえある。一方、日本語の挨拶は高度定型化され、便利でしかも無難な表現であり、迷わずに使える。また、2世は日本語主流社会で生活している以上、日本語で挨拶することには違和感がなく、つつい日本語で挨拶してしまうようになったと考えられる。ところが、相手が中国語を教える先生になると、相手の身分(職業)に配慮して、日常よく使用する日本語の挨拶表現をやめて、意識的に中国語で挨拶するようになったのであろう。

このように、日常の挨拶においては、ニューカマー2世の多くは中国語よりも日本語のほうをよく使用する。日本語はいわば普段着の言葉になっていると言える。

会話場面においても同じ傾向が見られる。図8は、中国人同級生と雑談する場面【3】での言語使用を家族と会話する場面のと比較したものである。比較に入る前に場面【3】を比較対象として取り上げた理由について説明しておきたい。回答者の家族はほぼ全員中国人である⁽⁴⁾。そのため比較する場合、家族以外の方も中国人である必要がある。また、5.2節で明らかにしたように会話場面においては、

図7 日本語及び中国語会話能力



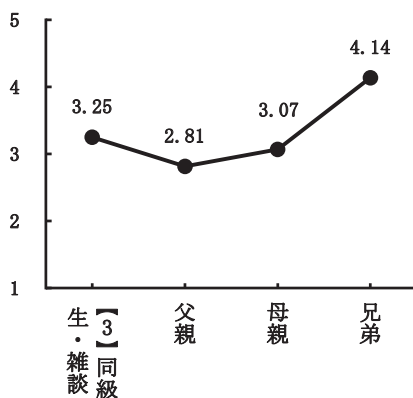
(3) 王秀芳(2008)では、ニューカマー1世という呼称を使用せず、在日中国人留学生と呼んでいる。

(4) 31名の回答者の内、父親が日本人であるのは2名、母親が日本人であるのは1名であり、残りは全部中国人である。

相手の身分や使用言語および話題といった諸要素が言語使用に影響を与える。比較する場合、要素がもっとも少ない場面のほうがより相応しい。以上の2点の理由から場面【3】、すなわち、一緒に中国語を勉強する同級生と雑談する場面を比較対象にしたのである。

図8を見ると分かるように、同級生と会話する場面の平均値は3.25である。このことから、中国語より日本語のほうが多く使用されていることが分

図8 会話場面における言語使用実態



かる。また、平均値は同級生＞母親、同級生＞父親となっていることから、親と会話するとき、日本語の使用が減少、中国語の使用が増えることが分かる。ニューカマー2世のほとんどが中国語教室に通ったり、親に教わったりして何らかの形で中国語を勉強していることをアンケート調査で分かった。家庭は2世にとって中国語学習のいい場所であり、中国語堪能の親を相手にする時、2世はできるだけ中国語で話し、中国語能力の上昇、または保持、継承を促すように努力していると思われる。それにしても親と会話する場面の平均値は3点前後に留まっている。すなわち、中国語の使用量はほぼ日本語のと同じく半々程度である。中国語で話そうと努力しながらやっと半分程度、残りの半分はやはり日本語に頼っている。では、もし努力しなければどうなるだろう。そもそも兄弟と会話する場面での言語使用と同様、中国語があまり使われず、日本語中心の言語行動になるのではないと思われる。2世にとっては、日本語は優位言語となり、日常生活でもっともよく使用される言語で、いわば普段着の言葉になりつつあると言えよう。

以上は、アンケート調査の回答に基づいて、在日中国人ニューカマー2世の言語使用実態について述べてきた。ニューカマー2世の多くは高い日本語能力を持っている。家庭においても、同じマイノリティ社会に属する同胞もしくは現地人の日本人を相手にする時においても、中国語より日本語を多く使用しており、日本語は日常言語生活の中で優位言語になっていることを明らかにした。一方、2世は中国語教室とか何らかの方法で中国語を勉強する人が多く、家庭でとりわ

け両親と話す場合、中国語で話そうと努力しているのも確認できた。さらに、日本語または中国語の使用は相手の国籍、相手の使用言語、相手の身分や話題などの諸要素に影響されることも明らかにした。勿論、アンケート調査には限界があり、それに回答者数も不十分であることは否めない。これらを今後の課題にしたい。また、同じ場面においても、人によって使用言語が異なる。これは言語意識やアイデンティティといった個人的要因に起因するもので、今回は触れなかった。これも今後の課題にしたい。

参考文献

- 陳天璽, 「在日華僑・華人のケース」, 『社会言語科学会第8回研究大会ワークショップ: 日本語と他の言語の使い分け』における口頭発表 社会言語科学会, 2001。
- 董劍秋・田浦秀幸, 「在日中国人家庭児の継承語と日本語能力に関するケーススタディー: バイリンガリティーの観点から」, 『立命館言語文化研究』33, 2021。
- 小川典子, 日本大学汉语継承語学習者の身份認同与汉语学习——基于四名华裔学生的纵向调查, 『国际中文教育(中英文)』Vo.8 No.4, 2023。
- 穆紅, 「二言語環境下の中国人児童生徒の母語保持要因—母語の認知面に注目して—」, 『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』4, 2008。
- 韋九報, 祖語水平保持的影响因素研究——以在日华裔青少年为例, 『语言文字应用』4, 2021。
- 王秀芳, 「日本における中国人オールドカマーの言語使用」, 『言語科学論集』9, 2005。
- 朱慧玲, 『日本華僑華人社会の変遷』, 日本僑報社, 2003。
- 過放, 『在日華僑のアイデンティティの変容』, 東信堂, 1999。
- 江衛・山下清海, 「公共住宅団地における華人ニューカマーズの集住化—埼玉県川口芝園団地の事例—」, 『人文地理学研究』29, 2005。
- 王秀芳, 「在日中国人留学生の言語使用—挨拶場面について—」, 『国語学研究』47, 2008。

付記 本研究は「天津市哲学社会科学資助項目TJWW17-0032」と「南開大学中央專項資金63172033」の研究助成金による成果の一部である。